（金のエンジェル賞　中学生の部）

そして私は背を向ける

中三・滝澤　飛雅

風船に限界まで空気が入った。そしてとうとう、その時が来る。

「ちょっと男子ー、まじめにやって。」

「ふざけないでよ。」

「全然気持ちがこもってないじゃない。」

針で刺された風船は、あっけなく破裂した。何で毎年同じことを繰り返すのだろう。また風船を一から膨らませるのは面倒なのに。

夏休み前、クラス全員で選挙をした。指揮者と伴奏者、そして自由曲が決まっていく。クラスは持ち上がりだったため、メンバーは一緒だ。昨年の「優勝」が、私たちに無言の圧力をかけてくる。

私がクラスメイトから与えられた使命は……、指揮者だ。昨年に引き続き二回目。何とかなるだろうという期待は早くも砕けちったわけだが、今年の私には心強い味方がいる。

放課後、私は理科準備室に立ち寄る。

「失礼しまーす。」

そこには、髪をお団子にして、メガネからチェーンを垂らす和藤先生がいた。生徒にはワトソンと言われているが、あの名探偵の助手とは違って口数は少ない。話を聞いてはくれるのだが、返って来るのはいつも一言。でも、その一言が絶妙なのだ。

私は早速、合唱の練習でクラスがバラバラになってしまったことを、マシンガンのようにしゃべった。私の話を黙って聞いていたワトソンの口がようやく開く。

「一歩下がってみれば。」

赤く染まる坂道をトボトボと帰る。どういう意味なのか、私はすぐには理解できなかった。

八月。久しぶりに会ったクラスメイトの顔は真っ黒に日焼けしていた。おいおいみんな、受験勉強は大丈夫か。換気は大事だからと開けられた窓が、冷気と私たちのやる気を奪う。最近の世の中は暑すぎる。

私はふとアオイが泣いていることに気付いた。女子から女子への攻撃は、背筋が凍るほど恐ろしい。

アオイは音楽が得意な明るい女の子だ。だけど、夏休み中も毎日歌の練習をし、自分と向き合う事で、気付いてしまったようだ。自分の声量がないことに。アオイは自分の居場所はないと思い込んで、口パクをしてしまったのだ。それに気付いた女子たちが容赦なくアオイを責める。そんなことに気付くこと自体がすごいと私は純粋に思うのだが。

「声量って増えるんですかぁ。」

私はいつもの理科準備室。

「本人が、気づくか、気づかないか、だな。」

自信をなくしたアオイは、教室で丸く小さくなっていた。歌に大事なのは、正しい姿勢とビッグスマイル。頑張れ、アオイ。

九月。うちの中学の天才作家・サクラがボイスレコーダーを片手に頭を抱えていた。歌った言葉と録音した言葉が違って聞こえるらしい。

「何回聞いても、わかものたちがばかものたちに聞こえるんだよね。」

そんなことはありえないと思いつつ、一緒に録音を聞くと、確かにバカ者たちに聞こえてきた。日本語は子音と母音で成り立ってい

るから、子音こそはっきり丁寧に発音しないと伝わらない。そのことをクラス全員に伝えると、面白がった男子たちが、わざと、

「ばかものたち〜」

と、歌い出した。やり直しをかけるたびに、うんざり顔も増え、塾を理由に途中で帰ってしまうクラスメイトも出てきた。

それからはもうめちゃくちゃだった。

「ちょっと男子ー、まじめにやって。」

「ふざけないでよ。」

「全然気持ちがこもってないじゃない。」

数人の女子が昨年と同じように、わめきちらす。

「うるさいのはお前らの声だろうが。」

数人の男子が火に油を注ぐ。

正義感の強いキリが、みんなの前に立った。

「このままでまた優勝できると思ってるの。」

賛同する人もいるが、しらけている人もいる。

「最後の一週間は、朝練をします。明日から七時半に教室に集まって下さい。」

指揮者の私が予定を尋ねられることもないままに、朝練をすることが決まった。どうして、合唱ってやらなきゃいけないんだろう。

挙動不審のレンは、実は音痴だから歌いたくないらしい。三十五人もいれば、歌が嫌いな人が一人や二人いても仕方がない。カオルとミノルはまじめな空気が苦手らしく、いつも消しゴムを指ではじいて遊んでいる。消しゴムが背中に当たったランが怒っている。ユズは部活中に転んで腕を折ってしまったらしく、三角巾が痛々しい。

「あれ。去年の写真も包帯じゃなかった？」

みんなの笑い声が響く。ユリは、この曲がとても気に入っている

ようだ。ダンスを習っているらしく、体を揺らして全身で歌っている。

このバラバラな個性の持ち主たちをどうやったら上手くまとめられるんだろう。

考えてみたら、ただ同じ年に生まれて、ただ近くに住んで、ただ同じクラスに集められただけのクラスメイトなのだ。みんながみんな仲が良いわけではない。

ワトソンが、金魚にエサをやりながらつぶやいた。

「考え過ぎるな。やるか、やらないかということだけだ。」

このメンバーが揃って歌うことは二度とない。今しかない、十五歳の私たち。そうか、やるか、やらないか、ただそれだけなんだ。

クラスメイトそれぞれに個性がある。一歩下がってクラスメイトの顔を見ていたら、まじめでも、ふざけても、笑っても、泣いても、それはそれで良い気がしてきた。たくさんの個性がぶつかり合ってできる合唱に、私は面白味すら感じ始めていた。本番に向けて、やってやろうじゃないか。ただただ数分のために。

十月。いよいよ明日が本番だというところで、事件が起きてしまった。なんと、クラスメイトのほとんどが風邪を引いてしまったのだ。こんなことが起きるなんて。みんなが百パーセントの声を出せない状況に、泣き出す女子もいた。

今まで（あえて）傍観しているだけの指揮者だった私だが、思い切ってみんなに提案をした。

「全員ボリュームを三分の二にしようよ。喉に負担をかけないで。音は小さくなってしまうけれど、丁寧な言葉で歌えば、聞いてる人にきっと気持ちは伝わるはず。」

伴奏のツバキが機転を効かせて、ピアノのボリュームも抑えて弾

いてくれることになった。
「明日の本番、大丈夫かな。実は私が一番心配……。」
弱音を吐く私に、ワトソンが実験の片付けをしながら言った。
「できるか、できないか。時間はみんなに平等だ。」
そして迎えた本番当日。三十四人のクラスメイトが壇上に上がる。ツバキが指を温めながら私に視線を送ってくる。
走馬灯のようにこの四ヶ月を思い出す。悩みを乗り越え、時には衝突し、それでも力を合わせ、同じことを練習してきた。それは、すごくシンプルなことの積み重ねだった。
キヅクカ、キヅカナイカ。
ヤルカ、ヤラナイカ。
デキルカ、デキナイカ。
合唱、楽しいじゃないか。この時間は一生に一回。できる時なんて限られている。できる時にできることをやったら良い。
私は一歩下がってクラスメイトを見てきたことで、何とかクラスをまとめられた気がしている。ワトソン、ありがとう。先生のアドバイス、じわじわと効きました。理科準備室は私のオアシスです。
キヅイタ……。
ヤル……。
デキル……。
クラスメイト全員が、十五歳の自分にいつでも戻れる合唱になりますように。願いを込めて、私はゆっくり丁寧にお辞儀をした。
そして、私は背を向ける。

画：マコカワイ